

ふるさと奥尻通信

令和3年2月19日
奥尻町教育委員会発行
事務局：01397-2-3890

海洋研修センターと稲穂ふれあい研修センターにて無料配布しています。奥尻町役場ホームページからもダウンロードできます。

巻頭言

戦前はもちろん、戦中戦後、昭和30年代くらいまで、島民の誰しものがイカ漁に関わった。一家総出、漁師だけではなく休日には学校教員まで。イカ釣りにしないのは警察官だけだと言われた。

特集 奥尻島の漁業のうつりかわり その②

前号に引き続き、奥尻島の漁業の変遷について紹介します。明治時代後半から漁獲対象が変化し、結果的に数多くの種類を対象とするようになり、新たな漁法の開発や生産、加工の方法にも徐々に変化が生まれてきます。それでも漁業の電化が急速に進むのは昭和40年代に入ってからのことでした。

ここで漁業経営について考えてみます。明治時代以降から多くの漁民たちが島に出入りした訳ですが、大多数は小規模経営の漁家が個々人で漁をし、それらを集める集荷人の手を経て、仲買人(親方)が引き取り、島外の間屋へ売り渡していました。資金や余裕のない漁師らは、先に漁具や食料、衣服など様々な品物を仲買人から前借し、その年の漁獲でもって返済する仕組みになっていました。前借する側を「飯食い」、貸す側を「親方」と呼び習わす「仕込み」もしくは「飯食い制度」と呼ばれる伝統的な労使関係が成立していたのです。これは船を持たない「乗子」だけに止まらず、船を持つ「船主」も仕込みを受ける場合がありました。返済額以上の漁獲を得ることが出来ない家も多く、負債が増えていく悪循環になりがちでした。



青苗漁港の漁船 昭和30年頃

奥尻最初の親方とされる人物は小林文吾という人で、明治12年頃に江差より来島し、鯨漁業を経営するとともに、島内60余戸の漁民に対して仕込みを行い、海産物を一手に引き受けていました。同30年代末までは唯一の親方で、松江に旧宅があったそうです。その後は仲買人が増え、同40年代には6人ほど、大正時代には15人ほどになっていました。

明治43年に設立された漁業組合は幾度の組織変更を行いながらも次第に組織立っていき、次第に発言権を得るようになると、組合員の負債を減らすことを目指しました。昭和12年になって、坪谷聖三組合長は仲買人と交渉して仕込み制度の廃止を取り決めます。その条件は、南部地区(松江以南)は仲買人7人分の組合員負債全額を組合が肩代わりし、10年月賦で返済。北部地区(赤石以北)は肩代わり資金不足のため、仲買人が奥尻商業協同組合を作り手数料を徴取するというものでした。その後、戦時統制のどさくさで負債がうやむやになりますが、戦後になって北部で仕込み制度が復活します。完全に廃止されたのは昭和35年で、奥尻漁協の坪谷正義組合長が再度交渉し、負債額を奥尻魚組(青苗は別)が北海道漁連の援助のもとに肩代わりすることで合意。これ以降は漁師から直接買い取る仲買が無くなりました。

仕込み制度の解体は、漁家の独立を促し、結果的に乗子の子船主化をもたらします。北海道漁連の成長とともに船購入資金の融資等の援助も備わり、漁業の自主化と船の小型化、省力化が進んでいきました。昭和30年代はイカの豊漁が続き、人口も増えており、奥尻の一次産業の中心である漁業がもっとも栄えていた時期と言えるでしょう。

奥尻島の漁業関係年表

1907-	仲買人が4~6人にまで増加。
1912-	仲買人が13~15人にまで増加。
1913	奥尻郡漁業組合設立。
同	組合員313人。組合員が漸次増加し、対岸からの入漁者200名を超える。その後、魚介類も年々減る。
1916-1917	イカ漁の川崎船は200隻に達し、石川能登、新潟、山形、秋田、美国、古平からの出稼ぎあり。
1922	入漁者を制限し繁殖保護を実施。
1924	松山水産会奥尻支部設置。
1927	奥尻村出稼漁夫供給組合設立。
1929	稲穂灯台霧笛信号所着工。



宮津地区でのスルメの集荷 昭和40年代

1930	奥尻漁業組合青苗支所を設置。
1933	青苗船入間竣工。現在の青苗港。
1934	釣懸船入間竣工。現在の奥尻港。
1936	未動力船5トン未満606隻、動力船5トン未満60隻、10トン未満67隻、20トン未満3隻。
1937	奥尻郡漁業組合が仲買人と交渉し仕込み制度を廃止取り決める。
1938	発動機船136隻、川崎船2隻、磯船603隻。
同	道南海運株式会社設立。15年函館へ
1944	奥尻漁業会設立。
1947	松江以南が青苗漁業会に分離独立。
1949	新組合発足。奥尻漁業協同組合：玉井静一、赤石漁業協同組合：野口初蔵、松江漁業協同組合：村井三郎、青苗漁業協同組合：西本兵平、稲穂漁業協同組合：坂本源次郎
1954	青苗と松江漁業協同組合が合併し、南奥尻漁業協同組合：西本兵平。奥尻、赤石、稲穂漁業協同組合が合併し、奥尻漁業協同組合：野口初蔵。神威協同組合発足。
1957-1960	イカ豊漁で中学生も手伝い(宮津中)。
1960-1965	イカ豊漁で生産繁盛休暇(稲穂中)。
1960	奥尻漁協が再度交渉し、仲買人に対する負債額を奥尻魚組が肩代わり。
1963	イカ豊漁。
1964	イカ豊漁。



釣石尋常小学校(現 奥尻小)の校庭に二宮金次郎像が建った時(昭和11年12月6日)の様子です。彼は、幼少期に薪をしょいながらも勉学に励んだとして勤勉の象徴とされています。江戸時代末期の農政家として活躍し、明治中期以降はその教えが「報徳」として広まり、「二宮尊徳」として顕彰されています。昭和初期以降は国民を啓蒙する存在とされ、全国の小学校に像が建立されるブームが起きましたが、戦後は撤去されました。



学芸員オスマエの一冊をご紹介します。本は海洋研修センター図書室で借りられます。

昆布と日本人
奥井 隆

創業150年になる昆布商の4代目が紹介する昆布の世界。日本食に深く根差した昆布を、その産地、種類、製造方法、流通、旨味の秘密など多岐にわたる項目を解りやすく述べる。北前船商いの実際、ワインと昆布のつながり、永平寺御用の話、世界に広がる昆布、フランス料理と昆布など「昆布」に興味をもつこと間違いありません。ぜひ読んでみましょう。

奥尻のつり 新春号

年が明けましたが、年末年始は真冬日がしばらく続きまして、雪も毎日降るような、北海道の冬らしい毎日でした。北西風が強くてフェリーも欠航するほどで、とても西海岸に出られるような天気ではありませんでした。年末年始のボーナスイカは皆無で、函館市場の取扱量も過去最低を更新したとか。まさにイカ不況です。ここは一つサクラマスの回遊を期待して、花を咲かせたいところ。1月中はアングラが風雪の合間に竿を振っておりました。まだ魚体は小さく「小桜」といったところ。一方で、シバレたせい、ノリは着きがいいようで海岸では盛んにこそげ採っている様子が見えました。すでに沖や港内には小さいホッケが回遊しており、このまま行くと春の磯釣りシーズンが期待できそうです。雪解けが待ち遠しいですね。

昭和奥尻生活詩 新谷清二の鳥賊つけ1ヶ月 第40回

釣石尋常小学校高等科二年生 文集「鳥の子」第八号より

の今しら賊ばて休そしら
つ晩て一のりみみろてな
そら十(揚)げとな鳥る。は
う働二二総な、い賊ぞよ朝
なく円十数か掛。付。しか
べん許枚千っけ一けも今ら
ただに二た声ヶのう晩出
風。な七百。ば月仕傾のて
だ今る十ばそかを度い鳥七
。日。銭かれり振だた賊尾
。おわり
はさ平りてでり。陽はより
。鳥ア均だもさ返もだ大り
賊亦とか鳥っ。漁釣

ど者子でこ計をらたア町五
多教育使れ画重、ン民ケこの
岐育て用はをね策結ケ三
に、す令発、定果一〇計度、
わ文青る和表年委をト〇画、
た化少も三す度員反を名策定
り財年の年る末会映実を在
ま、教で、予にのさ施対先
す。書、分年で新でなま
。室高野度すた検がし
な齢はま。な討 たて

社会教育アンケート



当時の釣石尋常高等小学校 昭和7年

での等業へ生ら一 が学十をま
は出科料イ徒紹環綴高校一迎し 第九
な費へをカ介でり等の年えた上 第一
かがのねつ多しま方科訓にま 号
つ伴進んけくたと二導当し段の
たっ学出はもめ教年だ時たの
のたにの日のた育生つの。日
で訳はて稼々で文をのた釣こ記
す。れりかイ。の導徒部尋は最
。簡な、ら力男中し秀常昭終
単り高授漁子かたに一和回

イカつけ日記について

しれ行い職をバたかキか、
よ、りま場配レね恒ヤ。今
う。消とすやるン。例ン恵大
。長い。おこ夕発行ペ方変の
今すうこの茶とイ祥事一巻珍
後るもうのなンはとン食し
ものし間どデどなもベか
注のはてにも、でかてつ
目の作間透完チしきのよ
でののし全ヨらま間うだ
す。でらのし全ヨらま間う
流てにコ?しに と

新米之記録(編集後記)

てた管で源が易はで朽相宅が
雨理水があ水大化次や一今
るのし道違り道忙よすぎ学○冬
こほて組うまにしようるま校日
ととい合たすはでが時した。水ど
にんまをめぐた。修も。道続ち
なす組に、くた。繕重ち管き
り。織、各さ。繕重ち管き
ま利島しそ集ん島業なよの島
す活にてれ落の内者つう破内
ね。用降維ぞで種のさたど裂の
しつ持れ水類簡んの老が住レ

水道のはなし



北海道エアシステム (HAC) 始発便のカバー